

[研究ノート]

コンラート・ツェルティスの書簡作成術

Die Brieflehre von Konrad Celtis

田中 圭子
Keiko TANAKA

1 はじめに

本稿で取り上げるのは、神聖ローマ帝国で活躍したラテン語詩人にして人文主義者、コンラート・ツェルティス（1459～1508）が刊行した「書簡作成術」と呼ばれるジャンルの著作である¹。

当時の知識人は、相互に書簡を取り交わすことによって地域を越えた広範なネットワークを形成していたとみられるが、それが人文主義の拡散と定着、さらなる発展の過程において果たした役割は、決して小さくはなかったであろう²。その検証には書簡の内容分析が有効と考えられるが、書簡というテキストは、多くの場合、社会において共有されていた一定の規範に従って書かれていたことに留意せねばならない。そのような規範を知るための史料として、書簡の構成や挨拶表現など、守られるべき約束事について指南する書簡作成術は注目に値するといえる。

書簡作成術は、ヨーロッパ書簡史研究において、個々の書簡や書簡集と並ぶ主要な研究対象と位置付けられる³。しかし、これを扱う研究の方法論の確立はこれからの課題であ

¹ 「書簡作成術」を含む著作は、Konrad Celtis, *Epitoma in vtramque Ciceronis rhetoricam cum arte memoratiua noua et modo epistolandi vtilissimo*, Ingolstadt, 1492 (以後、Celtis, 1492と略記する)。バイエルン国立図書館所蔵の刊本を参照。(http://daten.digitale-sammlungen.de/bsb00041707/image_1) (2018年12月9日確認) 「書簡作成術」のテキストは、次のツェルティス往復書簡集の中にも掲載されている。Hans Rupprich (hrsg. v.), *Der Briefwechsel des Konrad Celtis*, München, 1934, Nr.358, S.638-648。ツェルティスの著作に関する基本的文献は、Jörg Robert, "Celtis (Bickel, Pickel), Konrad (Conradus Celtis Protucius)", in: Franz Josef Worstbrock (hrsg. v.), *Deutscher Humanismus 1480-1520. Verfasserlexikon*, Bd.1, Berlin, 2008, Sp.375-427, bes. Sp.387-389。

² 拙稿「コンラート・ツェルティスの*Germania Illustrata*構想と知識人ネットワーク」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』55巻、2018年、213～222頁。

³ Carol Poster / Linda C. Mitchell (eds.), *Letter Writing Manuals and Instruction from Antiquity to the Present*, Columbia, 2007, pp.1-5。

り、対象とする時代によって研究の蓄積にも差がある状況である。Ars dictaminisと呼ばれる中世の書簡作成術の手引書に関しては、マーフィによる基礎的研究以来、調査・研究が比較的すすんでいるといえる⁴。しかし、人文主義の影響が書簡と書簡作成術に及び始めた14世紀以降に関しては、包括的な目録作成のような基本的な調査も含め、今後の研究の進展が求められている⁵。

一方、ツェルティスの著作と活動に関する研究においても、「書簡作成術」を対象とするモノグラフはわずかである⁶。その研究を行ったヴォルストブロックは、この著作をドイツ語圏の人文主義者による印刷された書簡作成術の最初の例と位置づけ⁷、典拠と手稿、印刷本の比較を通じてテキストの成立過程の解明に貢献した。

こうした先行研究の状況をふまえ、本稿では、ツェルティスの「書簡作成術」の内容を明らかにし、彼が書簡を執筆する際に念頭においていたであろう規範や理想を把握することを目的とする。これは同時に、中世から近世にかけての書簡作成術の変容過程の一端を明らかにすることにもつながるであろう。

2 Ars dictaminisと人文主義的書簡作成術

中世の書簡作成術は、Ars dictaminisないしArs dictandiと呼ばれ、書簡をはじめとする散文文書の作成法を教える修辞学の一分野とされる⁸。11世紀末～12世紀にイタリアで成立し、以後西欧各地で続々と書簡作成術の手引書が登場するにいたった。このような手引書

⁴ James J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages. A History of Rhetorical Theory from Saint Augustine to the Renaissance*, Berkeley – Los Angeles – London, 1974, pp.194-268; Martin Camargo, *Ars dictaminis, Ars dictandi*, Turnhout, 1991; Franz Josef Worstbrock, *Repertorium der Artes dictandi des Mittelalters Teil I. Von den Anfängen bis um 1200*, München, 1992; Benoît Grévin / Anne-Marie Turcan-Verkerk (eds.), *Le dictamen dans tous ses états. Perspectives de recherche sur la théorie et la pratique de l'ars dictaminis (XIe – XVe siècles)*, Turnhout, 2015.

⁵ Camargo, *op. cit.*, p.41.中世～ルネサンス期の手稿に関する調査報告としては、Emil J. Polak, *Medieval and Renaissance Letter Treatises and Form Letters. A Census of Manuscripts Found in Eastern Europe & the Former U.S.S.R.*, Leiden – New York – Köln, 1993; id., *Medieval and Renaissance Letter Treatises and Form Letters. A Census of Manuscripts Found in Part of Western Europe, Japan, and the United States of America*, Leiden – New York – Köln, 1994; id., *A Census of Manuscripts Found in Part of Europe. The Works on Letter Writing from the Eleventh through the Seventeenth Century Found in Albania, Austria, Bulgaria, France, Germany, and Italy*, Leiden – Boston, 2015.

⁶ Franz Josef Worstbrock, "Die Brieflehre des Konrad Celtis. Textgeschichte und Autorschaft", in: Ludger Grenzmann / Hubert Herkommer (hrsg. v.), *Philologie als Kulturwissenschaft: Studien zur Literatur und Geschichte des Mittelalters: Festschrift für Karl Stackmann zum 65. Geburtstag*, Göttingen, 1987, S.242-269.

⁷ Ibid., S.243f.

⁸ Murphy, *op.cit.*, pp.194-268; Camargo, *op.cit.*, pp.17-28; H. M. Schaller, "Ars dictaminis, Ars dictandi", in: *Lexikon des Mittelalters*, Bd.1, Stuttgart – Weimar, 1999, Sp.1034-1039.

は、多くの場合、書簡作成の理論的解説と、手本として活用できる文例集の組み合わせからなっており、その特徴は、古代ローマの政治家・弁論家キケロの『発想論』にみられる弁論の構成が、書簡に適用されていることである。それぞれの構成要素の対応関係については、表を参照されたい⁹。キケロは弁論を「序言」「叙述」「分析」「確証」「反駁」「結語」の6部分から構成されるべきものとした。弁論の「序言」は、聴衆を好意的にし、

【表】 弁論と書簡の構成要素

キケロ『発想論』による 弁論の構成要素	Ars dictaminisによる 書簡の構成要素	ツェルティスによる 書簡の構成要素
exordium 序言	salutatio 挨拶 exordium 序言	initium 導入 salutatio 挨拶 prohoemium 序言
narratio 叙述	narratio 叙述	causa 用件 narratio/expositio 叙述／説明
partitio 分析		
confirmatio 確証	petitio 用件	
reprehensio 反駁		
conclusio 結語	conclusio 結語	enumeratio 結尾句 character 文体

注意と興味を引き付ける役割を担っているが、中世の書簡作成術においても、読者の気持ちを差出人の方に向けさせるための部分とみなされ、「挨拶」と「序言」（「好意の獲得」ともいわれる）という二つの部分に拡大された。そこでは、差出人と受取人の社会的立場や関係をふまえた適切な表現が求められ、これが中世の書簡作成術における最大の要点であったといえる。その後続く本論の部分は「叙述」と「用件」のみに絞られ、最後に「結語」を置いた5部構成が、中世の書簡のスタンダードとなった。また、書簡作成術の確立は、政治や経済など社会活動の諸分野における文書化の進展に伴うものであり、これを身につけた者は、書記官や教師（dictatores）としてその技能を実践していた¹⁰。

14～15世紀になると、公的な領域においてはArs dictaminisが存続する一方で、親しい者

⁹ キケロによる弁論の構成については、次の邦訳を参照した。キケロー、片山英男訳「発想論」、『キケロー選集6 修辞学1』岩波書店、2000年、1～151頁。中世の書簡の構成については、次の文献を参照した。Camargo, *op. cit.*, pp.22-23.

¹⁰ Dictatoresは、書簡を「その場にはない、従って自ら話すことのできない者の意思を表明するもの」と定義しているという。これは公文書一般にもあてはまる性質であろう。中世において、書簡と公文書はきわめて近接した位置にあったといえる。*Ibid.*, p.18.

同士が会話するように書かれた古代の書簡を模範とする潮流が、人文主義とともに広がりはじめた¹¹。古典古代の著作を学び、文法・文献学的な研究を行った人文主義者たちは、中世を通じてラテン語が「野蛮な」状態に陥ったと考え、その純化をめざしたが、それは修辞学教育への人文主義の導入、さらにはそこで教えられる書簡作成術の内容の変化をもたらした。Ars dictaminisで重視された5部構成や精密で丁寧な挨拶表現は批判を受けるようになった。とはいえ、書簡から形式そのものが失われたわけではなく、方法論の説明と範例の双方を含んだ手引書の刊行も続いたが、人文主義的書簡作成術においては、形式への関心は中世と比べて後退する傾向にあり、むしろ柔軟に自身の考えを表現できる能力を育成することに主たる目的がシフトしつつあると考えられる¹²。こうして書簡は、人文主義の影響を介して、公衆の面前で行われる弁論をモデルにしたArs dictaminisに基づく書簡とは異なる、私的な自己表現の手段にもなりうる性格を強めていった。そのような歴史的展開の中で、ツェルティスの「書簡作成術」は、どのように位置付けることができるだろうか。

3 ツェルティスの書簡作成術

ここで取り上げる「書簡作成術」は、それ自体として独立した書物ではなく、1492年にインゴルシュタットで出版された『キケロの二つの修辞学に関する抜粋、新記憶術と有用なる書簡術とともに』¹³の一部である。ツェルティスはその前年の1491年末頃からインゴルシュタットで私講師として活動しており、1492年の夏学期から大学での講義を開始した。この書物は、これを機に刊行された教本と考えられる¹⁴。ただし執筆されたのは遅くとも1489年頃、ツェルティスがクラクフ大学で書簡術を講じた時期にさかのぼると推測されている¹⁵。

全22葉の小著であるが、表題に示されている通り、修辞学・記憶術・書簡作成術の3部から構成されており、冒頭にローマ王マクシミリアン1世への献辞、末尾に詩が付されている。これらのうち、修辞学を扱う部分が全体の半分近くを占め、記憶術は全体の10分の

¹¹ Ronald Witt, „Medieval „Ars Dictaminis” and the Beginnings of Humanism: a New Construction of the Problem”, in: *Renaissance Quarterly*, vol.35, 1982, pp.1-35; Judith Rice Henderson, „Humanist Letter Writing: Private Conversation or Public Forum?“, in: Toon Van Houdt / Jan Papy / Gilbert Tournoy / Constant Matheussen (eds.), *Self-Presentation and Social Identification. The Rhetoric and Pragmatics of Letter Writing in Early Modern Times*, Leuven, 2002, pp.17-38; Gideon Burton, „From *Ars dictaminis* to *Ars conscribendi epistolis*: Renaissance Letter-Writing Manuals in the Context of Humanism”, in: Poster / Mitchell (eds.), *op.cit.*, pp.88-101.

¹² Henderson, *op.cit.*, pp.32-38; Burton, *op.cit.*, pp.94-98.

¹³ 原題については注1を参照。Robert, *op.cit.*, Sp.387-389.

¹⁴ Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.25, Anm.3, S.42, Nr.32, Anm.1, S.56; Worstbrock, *op.cit.*, S.251.

¹⁵ *Ibid.*, S.251-255.

1 程度、書簡作成術は5分の1程度である¹⁶。3部からなる構成とその内容は、15世紀後半の人文主義者ヤコブス・プブリキウスの弁論術・書簡術・記憶術に関する著作を手本にしたものと考えられており、さらにテキスト自体も、他の人文主義者たちの著作と同様、先行する著作群を下敷きとし、多くの引用を編集して作成されている¹⁷。「書簡作成術」では、キケロの『発想論』、『ヘレンニウスに与える修辞学書』、クインティリアヌスの『弁論家の教育』といった古代の著作のほか、15世紀の作家であるニコロ・ペロッチェティとレオナルド・ブルーニ、そして前述のプブリキウスが典拠として用いられたといわれる¹⁸。しかし、これらの引用は、必ずしも原典から直接取られたわけではなかった。ツェルティスが「書簡作成術」執筆にあたって下敷きとしたのは、アグリジェント出身の人文主義者、フラヴィウス・グイレルムス・ラムンドゥス・ミトリダテス¹⁹が著したテキストであり、上記作品の引用はこれを介して取り入れられたと考えられている²⁰。ミトリダテスは、長くローマに住んだ後、1484年から1485年にかけてルーヴアン、ケルン、ハイデルベルクを歴訪したが、まさにこの時期にツェルティスはハイデルベルク大学の学生であった。ツェルティスが彼の書簡作成術を知ったのは、このときの他には考えにくい。その後駆け出しの教師となったツェルティスにとって、教本作成の模範とするに足る、自身がめざす教育に適した内容のテキストは、ミトリダテスの書簡作成術であったというこ

¹⁶ 全体の構成は次の通り。表題 (fol.1^r)、献辞 (fol.1^v-2^r)、修辞学 (fol.2^v-12^v)、記憶術 (fol.12^v-13^v)、書簡作成術 (fol.13^v-17^v)、記憶術に関する図表 (fol.18^r-18^v)、詩 (fol.19^r-22^r)。

¹⁷ 例えば修辞学を扱う部分は、キケロの『発想論』、当時キケロの著作とみなされていた『ヘレンニウスに与える修辞学書』、そしてプブリキウスの著作を典拠とする編纂物とされる。Worstbrock, op.cit., S.244; Robert, op.cit., Sp.388. ヤコブス・プブリキウス (生没年不詳) は、おそらくスペイン出身で、1460年代半ばからルーヴアン、ライプツィヒ、クラクフなどで教授活動を行い、1475/76年に記憶術書を出版した。これに弁論術と書簡術を加えた書籍は1482年に刊行されている。彼の記憶術は16世紀にも影響を与えたが、ツェルティスはこれに対しては批判的な立場であったといわれる。ツェルティス自身の記憶術については、Farkas Gábor Kiss, "Valentinus de Monteviridi (Grünberg) and the Art of Memory of Conrad Celtis", in: Rafał Wojcik (ed.), *Culture of Memory in East Central Europe in the Late Middle Ages and the Early Modern Period*, Poznań, 2008, pp.105-118.

¹⁸ ヴォルストブロックの分析によれば、プブリキウスからの引用が最も多く、次いでペロッチェティ、そのほかの作家からの引用はそれぞれ数行程度とされる。Worstbrock, op.cit., S.245-247. ニッコロ・ペロッチェティ (1429/30~1580) はサッソフェラート出身の人文主義者であり、1458年にシポント司教となった。彼のラテン語文法書 *Rudimenta grammatices* は1473年に出版され、広く読まれた。レオナルド・ブルーニ (1370頃~1444) はアレッツォ出身の人文主義者であり、1427年にフィレンツェ市書記官長となった。

¹⁹ J. Ijsewijn, "Flavius Guillelmus Raymundus Mithridates", in: *Humanistica Lovaniensia*, vol.26, 1977, pp.236-238.

²⁰ Worstbrock, op.cit., S.255-260. ツェルティスの「書簡作成術」の大部分は、ミトリダテスのテキストからの引用に一部省略などの編集、改変を加えて作成されており、挿入されている書簡の文例もミトリダテスからの引用であるという。

とであろう。

では、ツェルティスの著作として世に出た「書簡作成術」の内容はいかなるものであったのか、七つに分けられた項目ごとに述べていきたい。各項目には、冒頭の導入部分を除いて見出しが付けられており、それぞれに(a)～(h)の記号をふって示す。

(a) 導入

「書簡作成術」は、書簡の定義を示す、以下の文章で始まっている。

書簡とは、われわれの話や願い、ある考えの表現を、その場にいない相手に運び届けるものである。また、恥ずかしさやその他の状況によって、はっきりと話したり返答したりできないことを、発信し伝達するものである。それによって、われわれは口にされない自分たちの思考や意志を友や敵と伝え合うのである²¹。

ここで、書簡は「その場にいない相手」とのコミュニケーション手段と説明されている。そこには、当時の人文主義者によって広範に受け入れられていた、書簡を不在の友人との会話とみなす古代以来の観念の反映がみられるが²²、伝達の相手としては「友」だけでなく「敵」も想定されていること、また発話の文字化であるにとどまらず「口にされない」考えも表現され伝達が可能とされている点で、より幅のある定義であると考えられる。

(b) 「書簡の分類」(Epistolarum divisio)

ここでは、内容に応じた書簡の区分が述べられる。まず神の領域の (divina) 書簡と人間の領域の (humana) 書簡という大分類が述べられ、前者は天上なる (incoelestis)、聖なる (sacra)、道徳の (moralis) 書簡という3種類に分けられている。後者は、戦争や和平など歴史に残るであろう重大事 (gravia)、弔意などの慰め (consolatoria)、恋愛 (amatoria)、推薦 (commendaticia) ないし友情 (amica)、そして励ましの (hortatoria) 書簡に分類される²³。

²¹ "Epistola seu apostolus est vector et internuntius sermonis nostri desideriique et expressionis unius conceptus ad alterum absentia, rubore aut alio casu loqui certiolemque reddere nequeuntis, immissio significatioque vel qua cum amicis et inimicis tacitas nostras cogitationes voluntatemque communicamus." Celtis, 1492, fol.13^v; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.638. Rupprich編の往復書簡集所載のテキストに依拠して引用。以下も同様。

²² よく知られた「書簡は不在の友人同士による会話のようなもの (Est enim epistula absentium amicorum quasi mutuus sermo)」という一節は、4世紀にアンティオキアで活躍した修辞学教師リバニオスによると伝えられる。

²³ Celtis, 1492, fol.13^v-14^f; Rupprich, (hrsg. v.) *op.cit.*, Nr.358, S.639. 後述の「用件と叙述ないし説明について」と題された項目では、分類方法が若干異なっており、人間の領域の書簡は、重大事、慰め、友情の3種に分けられ、友情の書簡はさらに推薦、恋愛、機知 (genus urbanum)、励まし

(c) 「書簡の各部について」 (De partibus epistolae)

この項目では、書簡の5部構成について述べられている。

書簡は5つの部分からなる。導入、用件、叙述あるいは説明、結尾句²⁴そして文体²⁵である。書簡の導入とは、書き送られている者の心が（書かれている事柄を）受け取るよう気構えと準備をさせるためのものである。用件とは、われわれの心を（書簡を）書くように促している事柄である。叙述とは、他の人々について望んでいること、また、そうあってほしいことを打ち明け、述べるものである。結尾句とは、書簡の結語であり終わりである。文体は、書簡の内側と外側にあるものを含む。…²⁶

5部構成の原則は、中世の書簡作成術と共通しているようにみえるが、個々の構成要素は完全に一致しているわけではない。対応関係を示した前掲の表を参照されたい。Ars dictaminisにおける「挨拶」と「序言」にあたる部分は、一つにまとめられ「導入」と称されている。同様に、Ars dictaminisで「叙述」と「用件」に分かれていた部分は、後述の「用件と叙述ないし説明について」という項目の中で一つにまとめて扱われている。そして、上記の引用では第5の部分であるように書かれている「文体」は、書簡の構成要素とはみなしえない。従って、実質的には、ツェルティスのいう書簡の形式は〈導入—用件—結び〉という3部構成に近く、Ars dictaminisと比較すると緩やかな形式になっているといえることができる。

(d) 「導入の配置について」 (De initio constituendo)

この項目では、「書簡を書く際には書き送る相手の心をとらえるべく配慮すること。そ

という4つの下位分類をもつとされている。Celtis, 1492, fol.14^v-16^v; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.640-645.

²⁴ 原文では、数え上げを意味するenumeratioという語が用いられているが、後述する通り、これを扱う項目では、日付や挨拶など書簡末尾に記されるべき事柄について説明されているため、「結尾句」の語をあてた。

²⁵ 原文のcharacterという語は文体の様式を表すと考えられるが、ヴォルストブロックの解釈によれば、3種の様式を指す古代および人文主義の用法と、相手の位階に応じた様式を指す中世の用法の双方を含めて用いられているという。「書簡の内側」にある本文の文体には前者、「外側」にある表書きには後者の概念をあてはめているとされる。Worstbrock, *op.cit.*, S.248f.

²⁶ "Partes epistolae quinque sunt: initium, causa, narratio seu expositio, enumeratio et character. Initium epistolae est, per quod animus eius, ad quem scribitur, constituitur et praeparatur ad percipiendum. Causa est, quae animum nostrum impellit ad scribendum. Narratio est, per quam aperimus, quid ab aliis fieri volumus, aut quid factum sit, demonstramus. Enumeratio conclusio est epistolae et eius terminus. Character est, qui continet ea, quae intra et extra epistolam sunt." Celtis, 1492, fol.14^f; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.639.

れは挨拶と序言の二つの部分から構成されねばならない²⁷」と述べられ、書簡の導入部は受取人の「心をとらえる」ためにあると明言されている。その点において、古代の弁論およびArs dictaminisの「序言」と変わるところはない。しかし「挨拶」については、より高位の人物の名を先に記すよう求めた中世とは異なり、受取人の地位に関わらず、差出人の名を先にすると述べられ、「詩人コンラート・ツェルティス・プロトツィウスが皇帝フリードリヒ3世に謹んでご挨拶申し上げます²⁸」といった、古代ローマの書簡にならった簡潔な例が示されている。

(e) 「用件と叙述ないし説明について」(De causa et narratio, quae per expositionem fit.)

ここでは、「書簡の分類」で示された種類別に説明や文例が掲載されているが、全ての種類が言及されるわけではない。まず神の領域の書簡が取り上げられるが、これに関する文例は示されず、代わりにパウロやヨハネ、ヒエロニムスらのほか、プラトンやセネカの書簡が模範になると述べられている。続いて、文章において「野蛮さ」を避け、純粹かつ洗練されたラテン語を求める、人文主義的な態度が「できる限り用心しなければならないのは、われわれの時代の、そして粗野な民衆の野蛮さに陥らないようにすることである。それゆえ、正確かつ入念に、洗練されたやり方で書かれていなければ、決して読むべきではない²⁹」と表明されている。

次いで人間的な書簡に分類される主題の中から、重大事、慰め、推薦、恋愛、励ましが取り上げられ、文例も示されている。いずれについても、説明は簡潔な内容にとどまっているが、この「書簡作成術」が教本として刊行されたことを考え合わせると、本文の書き方についての詳細かつ具体的な指南は、対面での指導によって補完されたと推測できるのではないだろうか。

(f) 「結尾句について」(De enumeratione.)

この項では、書簡の末尾には人物(名前)、場所、日付が記されねばならないと述べられ、続いて結びの挨拶のヴァリエーションと、ローマ暦の計算方法が示されている³⁰。ローマ暦の数え歌も挿入されており、ツェルティスにとって、書簡冒頭の挨拶と同様に、結びに置かれる日付も古代風の流儀で書かれなければならないものであったことがわかる。

²⁷ "... sic scribens epistolam animun eius, ad quem scribit, conciliare debere curabit. Id autem duobus modis fieri debet: salutatione et prohoemio." Celtis, 1492, fol.14^f; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.639f.

²⁸ "Conradus Celtis Protucius poeta Friderico tertio imperatori S. P. D." Celtis, 1492, fol.14^f; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.640. "S. P. D."は"salutem plurimam dicit" (いくたびもご挨拶申し上げます)の略と考えられる。

²⁹ "... Circa quod cavendum summopere est, ne in barbariem cum nostri saecli et rudis vulgi cadamus. Nihil itaque nobis legendum erit, nisi quod caste, limate terseque scriptum est; ..." Celtis, 1492, fol.14^v; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.641.

³⁰ Celtis, 1492, fol.16^v; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.645.

(g) 「文体について」(De caractere.)

この項目の冒頭で「characterとは書簡の内側ないし外側に書かれるものである³¹」といわれ、「書簡の内側ではまさに、前述の表現法の教えをもってcharacterを守ってゆく³²」とも述べられている。「前述の表現法」とは、同じ書物に収録されている「キケロの二つの修辞学に関する抜粋」の中で扱われた文体論を指すと考えられている³³。従って、characterは、折りたたまれた書簡の内側に記された本文の文体の特徴を意味しているといえよう。しかしこの項目では、「前述の表現法」の内容との重複を避けるため、文体に関する説明はほとんど省略されている。これは、修辞学・記憶術と合わせて一冊の教本となるよう構成された結果であろう。この項目の大半は、受取人の名前に添える称号のリストで占められており、その前には次の文が置かれている。「しかし書簡の外側では、characterによって外から印をする。(書簡を)書く相手に地位を表す称号を書き添える際には、これを守る³⁴。」つまり書簡の外側におけるcharacterは、ある種の印の役目も果たすべく書かれた表書きであるように思われる。称号の例は、教皇にはじまる聖職者、皇帝にはじまる世俗の君侯、神学者にはじまる知識人という3グループに分けて列挙されており、その後に親族や女性に対する例も記載されている。このように社会的ヒエラルキーへの意識が表れている一方で、折りたたまれて閉じられることを前提に、書簡の内と外が明確に区別されている点も注目される。

(h) 「結語」(Peroratio)

最後に、この書簡作成術を学んだ者がすぐれた人物となるよう期待を述べた短い結びが置かれており、「ごきげんよう、ポイボス(・アポロー)に仕える者たちよ³⁵」という人文主義者らしい別れの言葉で締めくくられている。

4 ツェルティス没後の諸版

ツェルティスは1498年までインゴルシュタット大学で、それ以後はヴィーン大学で教授活動を行ったが、本稿で取り上げた「書簡作成術」を含む教本は、1492年の初版以降、版を重ねることはなかった。このテキストがそのまま忘れ去られず、より多くの読者に知られるようになった契機は、1530年代に複数の新編集版が出版されたことであった。

最初にツェルティスの教本の編集・出版を手掛けたのは、1530年頃からインゴルシュ

³¹ "Character est, qui intra epistolam aut extra scribitur." Celtis, 1492, fol.16^v; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.646.

³² "Intra quidem epistolam characterem observamus, cum elocutionis praecepta, quae a nobis superius tradita sunt, ..." Celtis, 1492, fol.16^v; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.646.

³³ Worstbrock, *op.cit.*, S.259.

³⁴ "Extra autem epistolam consignamus per characterem extrinsecus. Hunc servamus, dum illi, ad quem scribimus, dignitatis titulum adducimus." Celtis, 1492, fol.17^r; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.646.

³⁵ "Valete Phoebi cultores." Celtis, 1492, fol.17^v; Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.648.

タット大学で教鞭を執っていたフライジンク出身の学者、ヨハン・メンツィンガーであった。彼は、初版本に見受けられた誤植などを訂正しただけでなく、テキストの修正や一部の内容の変更にまで踏み込んだ編集を行った³⁶。修辞学・記憶術・書簡作成術が柱となる構成は変わっていないが、記憶術を扱った部分は異なる内容のテキストに差し替えられ、ペトルス・モゼラスによる修辞学書も追加された³⁷。書簡作成術に関しては、タイトルと見出しの一部が変更され³⁸、細かな文章の修正が行われたほか、「結語」は省略された。献辞やツェルティスの事績を顕彰する詩なども追加され、全71葉となったこの版は、1532年にインゴルシュタットで出版された³⁹。

この書物はバーゼルの印刷業者の目にも止まり、複数の作家による書簡作成術を一冊にまとめて出版する企画において、ツェルティスのそれも取り上げられることとなった⁴⁰。この書物は1536年にバーゼルで刊行され、その中に収録された4編の書簡作成術の著者は、フアン・ルイス・ビバス、デシデリウス・エラスムス、コンラート・ツェルティス、クリストフ・ヘーゲンドルフである⁴¹。錚々たる執筆陣の中にツェルティスが名を連

³⁶ 出版の経緯と内容の修正・変更の詳細については、Worstbrock, *op.cit.*, S.261–263; Robert, *op.cit.*, Sp.389.

³⁷ ペトルス・モゼラス (1493～1524) は、モーゼル川沿いのブルツィヒ出身で、ライプツィヒ大学でギリシャ語と神学を教えた。メンツィンガーは彼の弟子の一人。当該の修辞学書は1523年に刊行された。John L. Flood, “Mosellanus (Schade), Petrus”, in: Worstbrock (hrsg. v.), *op.cit.*, Bd.2, Berlin, 2013, Sp.239–255.

³⁸ 変更後のタイトルは、“Methodus conficiendarum epistolarum”である。

³⁹ Konrad Celtis, *Epitome In Rhetoricam Ciceronis vtranq[ue], & non inutile scribendarum Epistolarum compendium*, Ingolstadt, 1532. バイエルン国立図書館所蔵の刊本を参照。(http://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb10995952-1) (2018年12月9日確認)

⁴⁰ この版では、メンツィンガーが編集した1532年版のテキストが用いられている。Worstbrock, *op.cit.*, S.263f.

⁴¹ Juan Luis Vives, *De Conscribendis Epistolis Ioannis Lvdovici Viuis Valentini Libellus uere aureus. Des. Erasmi Roterodami Compendiu[m] postremo iam ab eodem recognitum. Conradi Celtis Methodus. Christophori Hegendorphini Methodus*, Basel, 1536. オーストリア国立図書館所蔵の刊本を参照。

(http://data.onb.ac.at/ABO/%2BZ181159407) (2018年12月9日確認) ビバスとエラスムスの書簡作成術については、Charles Fantazzi, „Vives versus Erasmus on the Art of Letter Writing“, in: Van Houtd / Papy / Tournoy / Matheussen (eds.), *op.cit.*, pp.39–56. フアン・ルイス・ビバス (1492～1540) はバレンシア出身の人文主義者。ルーヴァン大学で教えた後、1523～29年にイングランドで活動したが、ヘンリ8世の離婚に反対して庇護を失いネーデルラントに戻った。デシデリウス・エラスムス (1465～1536) の書簡作成術として知られるのは、1522年刊行の*Opus de conscribendis epistolis*であるが、これに先立ち1520年頃に出版された*Brevissima maximeque compendiaria conficiendarum epistolarum formula*が1536年版に収録されている。クリストフ・ヘーゲンドルフ (1500～1540) はライプツィヒ出身のルター派神学者、法学者であり、ライプツィヒ大学等で教授活動を行った。彼も書簡作成術を2著、1520年と1526年に出版しており、1536年版に収録されているのは後者である。Judith Rice Henderson, „Humanism and the Humanities: Erasmus’s *Opus*

ねたのは、彼の詩人・人文主義者としての名声があったからこそであろうが、キケロを範とする人文主義的態度を基本としながら、コンパクトにまとめられた彼の教本は、書簡作成に関する簡便な入門書として役立つと考えられたのかもしれない。この書簡作成術アンソロジーは好評を博したらしく、同様の構成の書物は1587年までの間に28の版を重ねたという⁴²。こうしてツェルティスの「書簡作成術」は、大学の教本としての当初の目的をこえて、多くの読者のもとに届くこととなった。

5 おわりに

本稿の結びとして、ツェルティスの「書簡作成術」の要点を振り返るとともに、その特徴と位置づけについて触れておきたい。

この「書簡作成術」では、想定されている書簡の内容は、戦争など社会における重大事から恋愛や友情のような私的領域にまで及んでいる。書簡は5部構成といわれており、この点だけを取り上げるとArs dictaminisとの共通性があるように見える。しかし、実際には、挨拶などの導入、用件を述べる本文、その後に関尾句を加える3部構成に近い内容で、形式上の厳格さはかなり後退している。また、挨拶や書簡末尾に記す日付には古代ローマの流儀を用いるよう求め、さらに文体そのものについても、中世の「野蛮さ」からの脱却を志向し、古代の作家が用いたような純粋で洗練されたラテン語を理想としている。多くの部分で人文主義的な特徴を備えているといえるだろう。

書簡の作成は、散文を用いる実用的スキルの一つとして、修辞学教育の重要な一部をなしていた。ツェルティスの「書簡作成術」も、授業用の教材とするために、既存の著作を引用、編集してまとめられたものと考えられる。それがツェルティスの死後に新たに編集されて版を重ねたのは、16世紀のエラスムスやビベスの書簡作成術に先立って、人文主義的な書簡の要点を掘り出してみせたものだったからではないだろうか。とはいえ、人文主義の展開と書簡作成術の変化の過程を関連付けてあとづけるには、中世末期から近世にかけて成立した多数の書簡作成術について、詳細な調査と分析を積み重ねていくことが必要となる。今後の書簡研究における大きな課題であろう。

また、「書簡作成術」において述べられているのはあくまでも方法論であり、実際に書かれた書簡との比較を行っていく必要があるだろう。その理論と実践の比較分析も含めて、ツェルティスが交わした往復書簡の内容分析を行っていくことが、研究の次のステップである。

de conscribendis epistolis in Sixteenth-Century Schools“, in: Poster / Mitchell (eds.), *op.cit.*, pp.141-177, esp. 152-156; Johanna Loehr, “Hegendorf (f) (-dorfer, -dorphinus, Seydensticker), Christoph”, in: Wilhelm Kühlmann, u.a. (hrsg. v.), *Frühe Neuzeit in Deutschland 1520-1620. Literaturwissenschaftliches Verfasserlexikon*, Bd.3, Berlin - Boston, 2014, Sp.217-223.

⁴² Worstbrock, *op.cit.*, S.264; Robert, *op.cit.*, Sp.389. 収録する著作の組み合わせを変えた版も数多く存在する。

本稿は、平成30年度～平成33年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）（一般）「知の技法としての人文主義書簡と近代教養市民の自己形成」（課題番号18K00107）による研究成果の一部である。